

カナダ農業 二千キロの旅

相良 和臣

昨年夏、全国農業協同組合中央会と全国農協青年組織協議会は、七十八人からなる「農協青年海外研修団」をカナダへ派遣した。以下は、そのときの研修団本部長をつとめた相良氏の、二週間にわたる研修旅行の思い出である。



カナダの農業といっても、私たちが訪れたのは、アルバータ、ブリティッシュ・コロンビアの二州で、東部には、まだ多くの多彩な農業が展開されていると聞いている。研修地としてカナダを選んだのは、これからの日本の農業を考える場合、とくに若い農業青年にとって、ヨーロッパや大洋州の農業以上に、カナダの農業に学ぶことが現実的であると考えたからである。

ミーティングを手始めに、カルガリー近郊での畑作・畜産の研修、カナディアン・ロッキーを横断して、カムループス、アガシの酪農、オカナガン・バレエの果樹、バンクーバー近郊のそ菜、といったコースをバスツアーで学んだ。私たちは、この十日間の旅を、「カナダ農業二千キロの旅」と呼んでいる。

カナダ農業についての印象は、参加した青年の農業経営形態によって、いろいろな見方や感じ方があるようだが、共通した印象の第一は、なんといっても、北限ギリギリに展開されるカナダ農業の、自然とのきびしい闘いの跡だったと思う。

とくに、アルバータ州の畑作でも、オカナガン地方の果樹園でも、灌水が作物育成の絶対条件ということが、その圃場を見て納得ができ、そのために多くの資金と労力が費やされていることに、強烈な印象をえた。

私たちは、この水との闘いというきびしさについて、日本における耕地の狭さという宿命と同じものを感じ、広大な国土を持つ国への羨望という誤った感情、甘い考えについて認識を改めさせられた。カナダ農民の開拓者精神に、頭が下がる思いがしたものである。

行政、試験・研究機関、生産者組織の有機的な結びつきと、一体となった生産対策も印象に残っている。

私たちは、訪問した各地の全コースで、アルバータ、ブリティッシュ・コロンビア両州の農務省の方々、農業試験場の研究者の方々に説明を受け、また生産者組織の代表とも懇談した。この中で感じられたことは、日本の同じ立場に立つ人々とは、その関係が根本的に違っているとい

う点である。

日本では、役人と農家という間には、何か深いミゾがあり、試験・研究機関と農家の技術の一体化といったものは、日常的にそう深い関係にはないと考えられているが、カナダでは、これらの人々が、友人といった感じで話し合っているという印象を受けた。サマールランド農業試験場では、果樹園の害虫防除について、試験場と農家が費用を負担し合って具体的な研究とその指導が行われており、その狙いも、農家の防除コストを引下げするため、といった具体性を持っているのには



感心した。

日系農家の方々と交流も、印象深いものがあつた。

ケローナで、果樹生産者組織の代表と懇談したとき、多くの人々は、リンゴの輸出を強く希望していたが、日系の代表だけはそのことにはふれず、「戦後、日本

のめざましい発展が、日系カナダ人の地位を高めてくれた。祖国に感謝している」と、手をかたくにぎってくれた。

また、バンクーバー近郊で訪ねた日系農家は、「日本は、工業優先のあまり、食糧自給率が低下していると聞くが、食糧は民族繁栄の基です。若いみなさんが、しっかりと日本農業を守ってほしい」と、励ましてくれた。

この二つの言葉によって、私たちがとかく忘れがちな、祖国・民族というものの大切さというものをカナダで教えられた感じで、大げさにいえば、祖国の再発見という貴重な教訓をえたことになる。

日系農家との交流で、忘れられない印象がもう一つある。それは、カナダに日本的な農業が立派に根づいていることである。

私たちは、この旅で、アメリカ系、ヨーロッパ系の農家も含めて、多くの農場を見学させてもらったが、日系農家の経営は、やはり、果樹にしても、そ菜にしても、家族労作を中心とした、小規模ではあるが経営実績の高い、商品化の高い経営が多かったという感じがした。

これは、日系農家に限ったことではないが、「生活を大切にしろ」ということを学んだのも貴重なことであつた。

私たちは、国民性かもしれないが、遊びというものを二の次とする考えがあり、働くことにだけに目が行きがちである。その点、ハウス経営をしながら、一か月もバカンスを一家で楽しむといった農家の生活を見て、若い青年たちは、「こうでなければこれからの農村生活は良くならない」と目を開かれた感じがしたと語っていた。

(全国農業中央会)